

むかし、あるところに、うんとかしこい男の子と、人の好いおじいさんが暮らしていました。

ある日のこと、おじいさんが田んぼをたがやしていると、侍が、馬に乗って、じゃんこじゃんこじゃんこと鈴を鳴らして、あぜ道をやって来ました。侍は、おじいさんの側まで来ると、馬の上から、

「おい、じい。おまえは、今朝から、くわを何度打ったか」とききました。くわを何度ふり下ろしたかなんて、だれにだつて分かるはずがありません。おじいさんは、こまっただまっていました。すると、侍は、

「あしたまた来るから、そのときまでに考えておけ」といいすてて、また、じゃんこじゃんこじゃんここと、行ってしまいました。

おじいさんは、こまったことになったと思いながら、田んぼをたがやしていました。

そこへ、男の子が、おじいさんにお弁当を持って来ました。おじいさんは、

「今、侍が通って、今朝からくわを何度打ったかときかれて、こまっけしもうた」と話しました。男の子は、

「じゃあ、こんど聞かれたら、四万八くわ打ちましたつて答えるといいよ。そして、あなたのお馬は、ここへ来るまでに何度足を上げましたかつたねてごらん」といいました。

あくる日、おじいさんが田んぼをたがやしていると、また、じゃんこじゃんこじゃんこと鈴を鳴らして、昨日の侍が馬に乗ってやつて来ました。そして、馬の上から、

「じい」とよびました。おじいさんは、「よしきた」と思つて、

「はいはいはい」と答えてかしこまりました。侍は、

「おまえは、今朝から、くわを何度打ったか」とききました。おじいさんは、

「はい。四万八くわ打ちました。ところで、あなたのお馬は、ここへ来るまでに何度足を上げましたか」といいました。

侍は、ちよつと考えこんでいましたが、やがて、

「じい、そりゃあ、おまえの知恵じゃあるまい」といつて、しかりました。おじいさんは、隠しておけなくて、

「じつは、わたしの孫が教えてくれましたので」と答えました。侍は、

「そりゃあ、なかなかかしこい孫じゃ」といつて、ふところから、薬を一服取り出しました。そして、

「この薬を持って帰って、孫に飲ましてみよ。もつとかしこい子になる」といつて、おじいさんにくれました。

おじいさんは、家に帰ると、侍が薬をくれたことを話しました。男の子は、

「めつたなものは飲まれん」といつて、薬を飲まないで捨ててしまいました。そして、

おじいさんに、

「あした、侍がたずねたら、孫は薬を飲んで倍もかしこくなつたと答えるといいよ」といいました。

あくる日、おじいさんが田んぼをたがやしていると、あの侍が、じゃんこじゃんこじゃんこと鈴を鳴らしてやって来ました。

「じい、昨日のくすりを、孫に飲ませたか」

「はい、いただきました、いただきました。おかげさまで、孫は、倍もかしこくなりました」

侍は、「ありゃ」というような顔をして、急いでふところをさがして薬を取り出しました。そして、薬を飲んだかと思うと、馬からころりと落ちて死んでしまいましたとき。

原話…『旅と伝説第』「土佐の國田ノ口村の昔話」三元社
再話…村上郁